



(東京西北部)

東京・馬場下町遺跡

- 1 所在地 東京都新宿区馬場下町
- 2 調査期間 二〇〇一年(平13)二月～三月
- 3 発掘機関 (株)大成エンジニアリング
- 4 調査担当者 小野真美
- 5 遺跡の種類 町屋跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

馬場下町遺跡は新宿区北部の戸塚地域、神田川の南岸約六〇〇mに位置する。神田川の北岸は急斜面であるが、南岸には沖積低地が

広がり、台地から低地へと緩やかに傾斜している。本遺跡はこの緩斜面末端の低地に立地する。そのため、南から北にかけて二五～九七cm程、複数回の版築・盛土が行なわれている。
今回の調査は、学校法人早稲田高等学校新第二号館

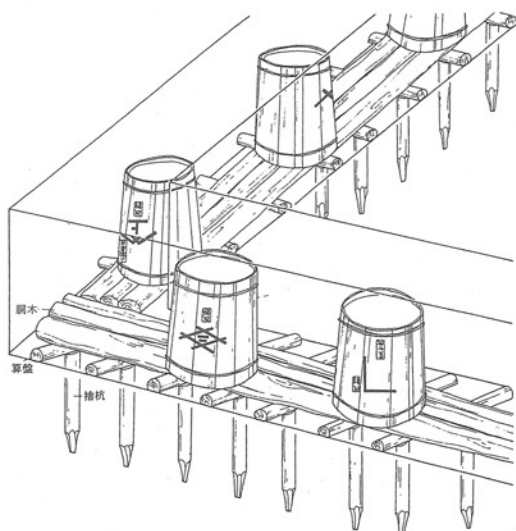
新築に伴う事前調査として実施された。その結果、標高九・七mで水平に広がる小礫を含む第一面と、北側に下る地山面の第二面が確認された。第一面は幕末から明治時代初頭まで、第二面は一七世紀中頃から末頃までの生活面である。

当地は、初め牛込村と呼ばれていたが、江戸時代以来馬場下町となった。その名の由来は高田馬場の東方、八幡坂下に位置したことによる。この地はもともと臨濟宗妙心寺派済松寺領であり、延享二年(一七四五)に寺社奉行町奉行支配下から町奉行の管轄に入り、町屋として認められた。

検出遺構は、第一面では土蔵・井戸・下水遺構・溝状遺構・埋桶・土坑・小穴、第二面では建物・埋桶・柱穴列・土坑・柱穴・小穴、このほか、貝類・材集中範囲も確認されている。遺物は陶磁器類・土器・炆器・木製品・自然遺物などが出土している。

土蔵跡(二二号遺構)の基礎に使用された柱受けの樽に文字が確認された。これは、「樽地形」と「算盤地形」と呼ばれる、軟弱地盤に重量建築物を設ける際にとられる基礎工法であり、樽は全部で一五基検出されている。攪乱により破壊されたものもあるが、おそらく二〇基あったと思われる。一五基中一二基の側板・蓋板に墨書や焼印が確認された。ここでは、墨書のある五基のうち、釈読できた三基を紹介する。

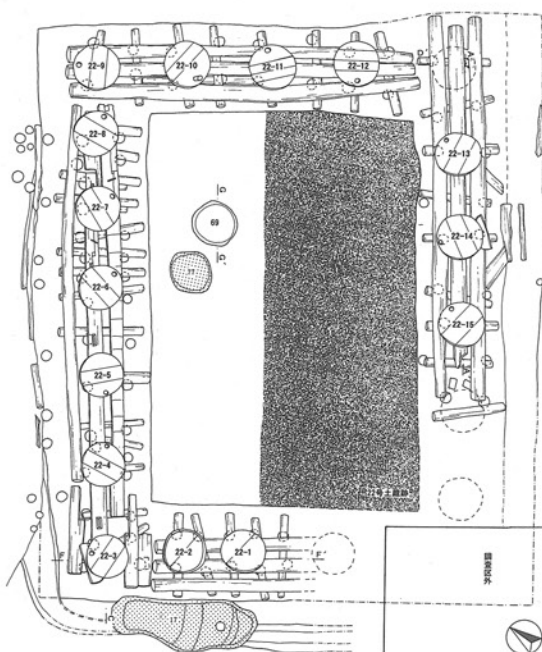
8 木簡の釈文・内容



「樽地形」「算盤地形」復元図

これらの樽は同一規格の杉材で作られており、「油新」「改詰」「小松□改」などの焼印や、井桁菱に「二」などの屋号が記され

- (1) 「指町」^{〔橋カ〕} (他二屋号・焼印アリ) 径450×高610×厚30 061
- (2) 「治」 径450×高610×厚30 061
- (3) 「五」 (他二屋号・焼印アリ) 径450×高610×厚30 061



22号遺構遺構図

ている。また、穿孔された蓋板や、内面に和紙を貼り漆を塗布した痕跡が見られることから、油樽が転用されたと考えられる。溜池遺跡や小石川後楽園遺跡から検出された樽地形の樽にも「油新」「改詰」の焼印や「井桁菱に二」の屋号が見られた。

9 関係文献

学校法人早稲田高等学校・(株)大成エンジニアリング『馬場下町遺跡』(二〇〇一年)

(小野真美)